房総半島南部における花卉栽培の地理学的研究

玉　城　恵　子

近年の経済高度成長に平行して，次第に花卉が日常生活に参加するようになってきた。この花卉の栽培現況を，東京に近く，しかも気候温暖という好条件を反映して栽培されている房総半島南部，即ち安房郡と館山市を合わせたいわゆる房州に焦点をあてて研究した。

第Ⅰ章で日本の全国的な花卉生産額の上昇とその中で第3位を占める千葉県の現状を考察し，しかも千葉県の８０％以上を生産しているのが房州である事から，房州の花卉産業の重要性を確認した。

第Ⅱ章で自然・人文両面から房州を概観した。気温について従来，房州の内陸より沿岸，東京湾岸より太平洋岸，北部より南部に高温である事が知られていたが，実際８ケ所の観測結果を集計・検討した結果，同様の回答が得られた。農家一戸当り平均耕地面積の狭少さは沿岸各市町で認められたが，中でも南部の白浜町は２６ａという極端な数字を示した。花卉の土地生産性が他の農産物のそれより例外なく高い事は，各市町での花卉産業の有利性を教えている。

第Ⅲ章で主として房州花卉栽培の現況を分析した。房州では営利的に花卉が栽培され始めた大正７・８年の露地花中心の当初以来，露地栽培に好適な海岸の暖所が栽培中心地となってきた。海岸は内房・南房の３地区に区分され，それぞれ特徴ある栽培形態を呈している。鋸南町・富山町・富浦町の内房は温室の取り入れが盛んであり，江見町・和田町の外房は露地・温室の混合，白浜町・千倉町の南房は温暖な事から露地物が圧倒的である。さて気候的に比較的近い条件を持つ外房と南房とにおいて，外房が露地から温室へ転換し，積極的に花卉栽培に取り組んでいるのに対し，最も気候的に恵まれた南房で花卉産業が停滞している現状を，両地区とも聞き取り，統計等からつかみとった。そこで南房の白浜町を特にとりあげ，原因を追求しその特異性を明らかにしようと試みた。

第Ⅳ章は白浜町での現地調査を中心に，外房の江見町，及び冬季の東京市場における重要出荷地である伊豆半島南部との比較から，白浜町における花卉産業を考察した。当町の花卉栽培は既述の如き狭少な耕地面積と気候的好条件からではあるが，その停滞は極めて複雑な当町の産業構成に由来している。耕地面積狭少の事実は，とりもなおさず兼業農家の占める率が大である事を物語る。二種兼業率が６０％を占める事は，農業中心従事者が婦人となり，さらにこの事は当町の特色ある産業であるアワビ採取とも密接な関連を持ってくる。アワビは最近の商品的有利性と婦人労働による事から，花卉とは競合の関係にある。どちらも捨て難く現在が均衡を保ったピークと言える。そ

の他最近伸びつつある観光業，安いが値の安定した蚕豆等との関連で，白浜町の花卉産業は独自の位置を占めている事が判明した。房州の花卉産業は新しい方向へ脱皮する地域と，現状維持の地域とに分かれ，今後も進行するであろう。

山形盆地北部の農業土地利用

塚　本　詔　子

調査地域は山形盆地の北部で，主として最上川の両岸の乱川扇状地と寒河江川扇状地である。東北の内陸盆地の一例としての山形盆地は，産業構成から見れば農業が圧倒的であり，土地利用は概していえば水田単作地帯の一つとして著名な所である。しかし特に乱川扇状地の方は，この傾向に反して畑作が卓越しており，いわゆる扇状地の土地利用の特徴がみられる。本論文では農業土地利用の面から，東北の内陸盆地の一例として，その地域性をとらえることを試みた。

論文の構成は次のとおり。

第一章　山形盆地の概説 ― (1)地形配置及び地質　(2)気候　(3)農業土地利用。

第二章　山形盆地北部の自然・人文 ― (1) 地形分類　(2)河川及び地下水　(3)産業　(4)集落　(5)農業土地利用。

第三章　乱川扇状地における果樹栽培の発達。

第四章　乱川扇状地の農業土地利用の特性 ― (1)立地条件　(2)果樹栽培。

第五章　要　約

農業土地利用を概観すると，乱川扇状地は湧泉帯以東は扇側部・扇頂部にわずかに水田がみられるほかは，すべて畑であって，その中でも野川を境として以北はたばこを主体とする普通畑，以南はりんごを主体とする果樹園となっている。一方寒河江川扇状地は，扇状地面は９０％以上水田である。このように両扇状地は農業土地利用景観からしても地域区分がかなり明確にできるが，農家経営の面から見ると一層はっきりする。即ち山形盆地北部の傾向として，単一経営農家が約８０％を占めており，水田地域はいねの単一経営であり，畑作地域では工芸作物単一経営，あるいは果樹単一経営となっている。そのほかは主に水田地域と畑作地域との境界に当る湧泉帯附近や山麓及び扇側部，最上川段丘面に位置する地域は，いねと畑作物の複合経営を行なっている。

農業土地利用の変遷をみると，水田地域は歴史も古く，集落の発生と共に開田され，明治以後，最近に至るまでほとんど面積的変化はない。畑作地域は主に乱川扇状地の扇体であるが，扇央部の開墾以後，変化がみられる。１９３６年あるいは４３年の開拓入植と果樹栽培の成功がきっかけとなり，養蚕業の不振に伴って以前畑作地域に於て支配的土地利用であったたばこ栽培は地域化され，